

〔翻 訳〕

## 『閑 中 録』(一)

作 恵慶宮洪氏  
翻訳 梅山秀幸

〔『仁顯王后伝』『癸丑日記』に続いて、この論集の場を借り、『閑中録』を訳出してみたい。前の二作についてはそれぞれ仁顯王后、仁穆王后のそば近くに仕えた内人の作であるということ以上は不明だが、『閑中録』の作者は英祖の子で悲運の死を遂げた思悼世子の嬪であった恵慶宮洪氏その人である。その生い立ち、執筆の事情については本文の中で子細に述べられている。十八世紀後半の朝鮮王朝のありようとその失のみがあげつらわれがちな儒教に裏打ちされた支配階級の最も良質のエトスをうかがうことができる。この『閑中録』の訳によって、朝鮮宮中小説三部作の翻訳作業を終え、訪れるたびに暖かくもてなしてくれる友人たちとその風土に対して決して報いきれない礼の一片としたい。なお『韓国古典文学大系 6 한도록 閑中漫録』(教文社)を底本とした。〕

わたくしは幼くして宮廷に入ることになったために、実家とは手紙の往復を朝夕に行ったが、わたくしの手跡が多く残るのを懸念して、今は亡くなったお父さま<sup>1)</sup>はいつもわたくしを教えさとし、

「民間からの手紙が宮中に入っていくのはみだりがましいことはあるまいか。また見舞いのことば以外に事細かに書くのはもってのほかで、道理にかなわないことだ。朝夕の封書の返答には、その紙に消息だけをしたためて送るように」とおっしゃった。そこで、亡くなったお母さま<sup>2)</sup>が朝夕にくださる機嫌うかがいの封書には、お父さまのことばどおりに、その封書の紙の上のあたりに簡単に消息だけをしたためて送り返した。実家の方でも、わたくしのしたためた文字はすべて水に洗い流して、わたくしの筆跡はほとんど残らないようにしたために、伯姪の守栄<sup>3)</sup>はいつも、

「本家には叔母さまの手跡がまったくございませんので、どのような文字でも結構ですので、おんみずから書いたものをいただければ、叔母さまの品質が保存されて、一家の宝物となることでしょう」

と、しきりに催促したが、暇がなくてなかなかかなわなかった。乙卯の年(1795)になって、わたくしも還暦を迎え、亡夫への追慕の思い<sup>4)</sup>が今なおやみ難く、また三月を過ぎるころから、気力もしだいに衰えていくようで、わたくしがこれまで感じたこと、経験したことどもを、心に思い浮かぶままに記録してみようとしたものの、百のうちの一つの外には書かなかった。

先の英祖の御世の乙卯の年(1735)、六月十八日の午の刻に、お母さまは盤松坊居平洞にあるご実家の李氏宅でわたくしをお産みになった。前日の晩、お父さまは黒龍がお母さまのいらっしゃるお部屋の天井にひそんでいる夢をご覧になったが、生まれたわたくしが女子であったために、その夢のきざしに合わない、不審にお思いになった。お祖父さまの貞献公<sup>5)</sup>がやって来られ、のぞきこんで、

「この子はたとえ女子であっても、並みの子ではない」

とおっしゃって、特にかわいがってくださいました。

産後、三七日がたって、家に戻るようになったとき、ひいお祖母さまの李氏<sup>6)</sup>はわたくしをご覧になって、

「この子は他の子とちがうので、たいせつに育てなさい」

とおっしゃり、将来を期待して、乳母をみずから探してつけてくださいました。わたくしがようやく大きくなるにつけても、お祖父さまは格別にかわいがってくださいまして、その膝もとに置いて、かたときも離さず、いつも冗談のようにして、

「この子はまだ幼いが、成人を早くすませよう」

とおっしゃっていた。わたくしにはそのことばの意味がよく飲みこめなかったものの、そうしたことを宮廷に入った後に回想してみると、わたくしの一生について思い当たるふしがあり、おふたりの王さまのもとで重い地位にいらっしゃった方のそうしたことばには、なにか予感めいたものがおありだったのだろうか。

わたくしが幼かったころには、お姉さまがいて、お父さまとお母さまはわたくしたちを二つの玉のようにかわいがられたが、そのお姉さまがはやく死んで、わたくしが慈愛を独り占めするようになったのは、まったくもって天倫の目論見の外であったろう。お父さまとお母さまのしつけは厳しいもので、特に大きなお兄さま<sup>7)</sup>

については峻厳にお教えになった。しかし、わたくしは女子であったから、お父さまの愛情もおのずから別で、わたくしもいつもいっしょにいて、お父さまとお母さまのおそばを決して離れようとはしなかった。しだいに物どころついていったが、事の大小を問わず、心配をおかけすることが少なかったから、そのため、お父さまもお母さまもいっそうわたくしをかわいがってくださった。わたくしがいくら女子の身の上であっても、心中にどうしてそのことに感激することがおろそかであったろうか。お父さまとお母さまが異常とっていいほどにわたくしを偏愛してくださったことを考えると、不肖のこの身が宮廷に入ることになって、それを考えるごとに、いつも涙がこぼれて、心が痛む。

貞献公は永安尉<sup>8)</sup>の曾孫であって、貞簡公<sup>9)</sup>の孫子にあたる。僉正公<sup>10)</sup>が愛した二番目の子息として、安国洞に新しい屋敷を作り、分家なされた。その屋敷と庭園の規模は宰相のものようであったが、財産を分けてもらうことはせず、貞献公の生活はいつも貧窮していた。だが、伯祖の参判公<sup>11)</sup>がお父さまを至極に愛し、いつも額をなで回して、笑いながら、

「この子は尹梧陰<sup>12)</sup>と同じ運命のようなものをもっており、今はたとえ困窮していても、将来はきっと富裕になるだろう。人は、昔から、後に幸福になる者は、若年に苦勞をするのが法というもの」

といて、あえて財産を多くわけ与えることをなさらなかったが、これはやはりひとえにご自身の弟を愛する心から出たものであった。そうした目論見にはみな感嘆したものの、わが家の生計は切迫することが多かった。貞献公はその身分は尊くて、職分は尚書<sup>13)</sup>に至りししたものの、心は清廉のまま、産業をおろそかにお考えになったために、家は貧しく、たんなる寒士のようにであった。

継祖母<sup>14)</sup>は学問をなさったソンビ<sup>15)</sup>の娘であって、本来の学識が人とはちがっていた。その性行も賢淑かつ仁慈であり、貞献公がこれを敬いなさることはおごそかで、まるで客人のごとくなされた。屋敷の中の生活と食事の切りつめ方も、貞献公の清徳をうかがって、一味淡泊といったところ、はなはだ儉粗に過ごされた。そのために、お母さまも宰相の家の長女であるにもかかわらず、一年の間、ひとそろいの緋緞の服を着られることもなく、手箱にはまたなにがしかの装身具さえもなく、外出のための衣服もひとそろいの他にはなかった。そうして、垢がつけば、みずから洗って、機織りと針仕事とで夜を明かされたので、下の部屋では空が明るくまで、灯火がともっていた。お母さまはみずからそうして夜を徹して仕事をするの

を、老若の僕たちが見て気を遣わないようにおもんばかり、窓に黒い布をかけておいて、人びとが称賛することを避け、苦勞を隠そうとなさった。寒い夜に根をつめて、手がこごえたりなさがったが、それで患われるようなことはなかった。また衣服の節度を守り、子女に服を着せるにしても、はなはだ儉素ではあったが、それでも、適期、適時には用意してくださった。わたくしたち兄妹の着るものも粗い織りで木綿であったが、いつも清潔なものを着せてくださった。お母さまは喜びと怒りの感情を軽々しく表に出すことはなく、気性がおだやかな中にも、厳粛でいらっしやったので、家中の者みながその徳性をあおぎ見て、しきりに感嘆するのだった。

わが家は都尉の後裔で、両班の大族であり、外家の李氏は清吏の門戸であった。わが伯姑母<sup>16)</sup>は名官の妻となり、仲伯母<sup>17)</sup>は顯宗の子息の青陵君の息子の嫁であった。季姑母<sup>18)</sup>は吏部尚書の嫁であり、仲母<sup>19)</sup>は吏部侍郎の娘であった。こうした一門の婦女の内外での名閥ぶりが世の中の称賛を受けたが、これらの婦人たちには世俗の婦女にありがちな傲慢な態度と奢侈なることがいささかもなく、季節ごとの祭りに際しての集まりにはお母さまが上への応対と下への接触をねんごろに行って、情宜に厚かったので、家の中は和氣藹々としていた。そのようなところに、幼いころから育って、わたくしが深い感化を受けないはずがあらうか。仲母はなかでも徳行が人に抜きん出ている、あらゆることの処理において姑をたてて、身のこなしが高潔で、文識も卓越しており、まさに林下の風味、女中のソソビといつてよかった。その仲母がわたくしをかわいがって、オンモンを教え、その他さまざまな指導を格別にしてくださったので、わたくしはお母さまと同じように崇めたものだから、お母さまはいつも仲母に、

「この子はあなたにそれはそれはよくなつておりますね」  
と、おっしゃっていた。

貞獻公が庚申の年（1740）にお亡くなりになって、お父さまがお哀しみになるご様子は仰ぎ見ることもできないほどであった。

三年の間、社壇に仕え、昼夜に精誠を尽くされたが、三年の喪を過ぎても、さらに喪に服そうとなさった。わたくしは蒙昧ではあったが、どうしてお父さまの孝心にあえて見習わないことができたろうか。お父さまの行実とは異なり、毎日、暁には祭壇で拝礼して、朝になると継祖母にあいさつをして、温和なことばと柔らかな顔色をもってお仕えしたが、対する継祖母はお父さまを愛し、これに期待なさることは格別で、見ること、聞くこと、すべてに感服なさった。

お父さまは上には二人の姉上に仕えることが特別で、下には弟に教訓することがきわめて厳しかったが、その弟からはかえって慕われなされた。辛酉の年(1741)に伯姑母が流行病にかかり、親族はみなこれを避けるようにしたが、お父さまは、

「はらからの病を見ないようでは、なにがはらからの情であろうか」

と、おっしゃって、みずから看護なされた。しかし、その甲斐もなく、伯姑母はその病でとうとうお亡くなりになったので、手ずから葬礼を丁重に執り行われた。そうして、その子どもたちの身が散り散りにならぬよう、仁者らしく救済なされて、そのうちの一人はみずからの手もとに引き取って、育て上げ、婚礼まであげさせなされた。かくも親族間の敦睦なる風が厚く穏やかであって、李進士宅、李南平宅に嫁がれた二人の姑母もこちらの家にしきりにおよびになったが、そこにも孝道的一端をうかがうことができよう。継祖母に養育を受けたという恩恵を忘れることなく、祭祀には必ず参礼して、哀悼なすることが、実の母親の忌と異なることがなかった。これらのことは、わたくしがまだ親元にいたときに拝見したことであったが、また、学問に力を尽くして、有名なソソビたちと学問についていつも議論なされていて、交親師友たちがたがいに尋訪しない日はなかった。

お母さまは庚申の年(1740)の後、三年の喪を礼法通りに、みずから整えて、執り行われた。身のこなしは礼にのっとり、朝は早くに髪を洗って櫛で梳き、お姑のお見舞いに時を違えず、髪を梳いて結い上げていらっしやらなければ、あえて仰ぎ見することをせず、いつも大きなチョゴリを着ていらっしやらないときはなかった。お父さまを敬いなさるさまは、凡俗の婦女とはちがっていたが、お父さまのお母さまに対する恭謙ぶりもまた格別であったことが、忘れることができない。

お母さまは丁未の年(1727)に黄海道の海州監營<sup>20)</sup>で婚礼をお挙げになったものの、すぐに外祖父<sup>21)</sup>の葬礼に遭ったために、新婚の礼は整えることもなくて、翌年に延ばされることになった。また、戊午の年(1738)には外祖母の葬事に遭い、哀惜がはなはだしかったが、実家に長くとどまることはできず、嫁ぎ先の洪氏宅に戻られたが、兄弟姉妹方もいつもいっしょにやって来られた。お母さまの実家が清貧であることについては世間でも有名で、もともと兄弟姉妹のあいだの友愛がまれなほど厚い上に、婦女子たちも相和していらっしやった。内舅の知礼公<sup>22)</sup>の夫人の洪氏が、小姑にあたるわたくしのお母さまを応対なさるさまは特別にねんごろで、内舅はわたくしを格別に愛してくださったし、また外従兄の山重氏などもいつ

も親切であった。

お母さまの姉妹はお三方で、そのうち金生員夫人は早く寡婦となったが、お母さまは極尽にお世話して、葬事のあとには、いとこたちを気の毒に思っ、わが子と同じようにかわいがり、糧食と衣服を整えて、飢えと寒さをしのがせ、後には嫁取りまでさせておやりになった。いとこたちはいつも、

「他の人はみなただひとりしか母親がいないのに、わたくしたちにはふたりの母親がいる」

といて、感激していた。

そのいとこの金履基氏は辛酉の年（1741）の晩春に外家で婚姻を執り行い、お母さまもそちらにいらっしやう。おばさまの宋参判夫人の長女は後にわたくしどもの季母<sup>23</sup>になられたが、子どもころはいつも外家でいっしょに遊んでいたものだった。季母はいとこの金履基氏の婚姻のさいには華麗に着飾って参礼したが、わたくしはそのとき、まだ正装をする年齢になっていず、模様のない白い服を着ていたので、お母さまがわたくしに、

「だれそれはあんなにきれいに着飾っているのに、おまえは質素ななりで、おまえもさぞあの子のように着飾りたいことだろう」

とおっしやうが、

「わたくしはお祖父さまの喪服を着ているので、他の子たちのように色服を着ようとは思いません」

と、わたくしは答えた。

わたくしはずっとお母さまのそばにいて、門の外に出ることもしなかつたし、幼くて物事を知らず、わざとさかしらぶつた答を考えたわけではなかつたが、こうしたことも、きつとお父さまとお母さまの日常の教訓が幼いわたくしに及んだものであつたらう。

癸亥の年（1743）の三月、お父さまが太学掌議<sup>24</sup>として崇文堂において王さまに拝謁なさることになった。そのとき、お父さまの春秋は三十一で、資質が金玉のよう、風采は鳳凰のようで、儒生たちの中でも抜きん出ていらっしやう。人との応対と日常のふるまいがみな清潔であつたので、王さまにはことのほかお気に召された。王さまにお目通りした後に、科挙が行われることになって、儒生たちが「願ってもない機会だ」と気負いたつたが、王さまの意がお父さまにあつたことは明らかであつた。しかし、堂叔<sup>25</sup>までがわが家にやうて来て、うれしい及第の通知を

待っていたが、及第することなく帰って来られたとき、わたくしも失望して泣いたことだった。その年の秋、懿陵<sup>26)</sup>への参拝が行われたが、これがわが家で庚申の年(1740)のお祖父さまの死後、官禄を受けるようになった始めであった。全家中がこれを喜んだが、お母さまはその最初の封禄を一家親族にひとしく分け与え、家には一升の米も残されなかった。

その年に王世子の嬪を選ぶことになったので、単子<sup>27)</sup>を出すよう命令が下って、ある人は、

「ソンビの子女はお妃選びには参与しない方が害がありますまい。単子はお出しにならないことですな。貧しい家では衣装を整える気苦労だけでもたいへんです」

といったが、お父さまは、

「わたくしは代々禄を食んできた臣下の身であり、娘は宰相の孫娘です。どうしてお上をいつわることができましょう」

といって、単子をさしあげたが、そのときのわが家といったら極貧のありさまで、衣装を新たに作って着ることができないので、チマの生地は兄の婚姻に使ったもので間に合わせ、服の中には古いぼろぎれを入れて着ることにして、そのほかの婚姻の準備は母親が借金をしてまで用意してくださったが、その心労なされた様子が今でもまぶたに焼き付いている。九月二十八日に初めてのお目見えとなり、英祖大王はこのつたないわたくしの才質を称赞なさることがはなはだ過ぎて、格別にかわいく思ってくださったようだった。また貞聖王后<sup>28)</sup>はわたくしの性格に浮わつたところのないのをご覧になり、宣禧宮<sup>29)</sup>はわたくしがお目見えの席に出て行く前に、あらかじめわたくしをご覧になるや、和気が表情にみなぎって、いとおしんでくださった。左右に宮人たちが居ならんで見守っているの、わたくしは心身ともにはなはだ疲れたが。下賜品をくださるのにもない、それにわたくしが返礼する挙動を、宣禧宮と和平翁主<sup>30)</sup>はつぶさにご覧になって、いちいち礼儀にかなっていることとうなずかれた。そのまま退出してきて、お母さまの横でその晩を寝て過ごしたところ、翌日の早朝、お父さまがいらっしゃって、お母さまに、

「この子をどうもお気に召したようなのだが、さてどうしたものか」とおっしゃって、むしろ心配なさっていた。

「寒微なるソンビの子であるとして、取り上げられなければ、いいのだが」とおっしゃるお父さまとお母さまのことばを夢うつつに聞いて目覚め、心がはげし

く動揺して、しとねの中でおおいに泣いた。宮中でみながかわいがってくださったことが思い返され、またおどろいて、すこしも心楽しむことがなかった。お父さまとお母さまはかえってそういうわたくしをなぐさめて、

「おまえはなにもわからなくていいのだよ」

とおっしゃっていた。そうして、わたくしは初めてのお目見え以来、はなはだ憂鬱な気持ちでいたが、それは心ならずも宮廷にはいって、無数の変遷を経験することになるのを、心におのずと予感してのことであつたらうか。そのとき、一方ではたいへんなことと思いつながら、その一方では人事不省でぼんやりとしていた。

そのお目見えの後というもの、親類の者でわが家を訪れる者が多くなり、絶縁していた下人たちもふたたびやって来るようになって、人情と世態というものがよくわかったものだった。

十月二十八日に再度のお目見えがあつて、わたくしも心中ひとかたならずおどろき、お父さまとお母さまも心配しながら、わたくしを宮廷に送りだし、なんとか選に洩れてくれないかと望んだものの、宮中に入っていくと、そのときにはすでに本決まりになっていたようで、わたくしの臨時の居所も決まっておき、応接する様子も他とは異なっていたので、いっそう心に恐縮した。王さまの御前に参るときも、他の処女たちの場合とは異なり、簾の内にまで入っていくと、英祖大王が頭をやさしく撫でて、

「わたしも、息子に美しい嫁をもらうたことだ。お嬢ちゃんのお祖父さんを思い出すわい」

とおっしゃり、また、

「お嬢ちゃんのお父さんを、わたしは見て、人物を得たと喜んだものだったが、なるほど、なるほど、あの者の娘なのだな」

とおっしゃって、お喜びになった。貞聖王后と宣禧宮とはわたくしをたいへん気に入ってくださって、喜ばれたし、翁主たちもみなわたくしの手をとらえて、かわいがってくださった。そのまま外に出してもらえず、景春殿<sup>31)</sup>という建物にとどまって、行儀よくじっとしていると、昼食をふるまわれ、内人<sup>32)</sup>がわたくしの着ていた服を脱がせて寸法をはかろうとしたが、わたくしが脱ごうとしないので、その内人がわたくしをなだめて、ようやくのことで脱がせて、寸法をはかった。そのときのわたくしの気持ちといえば、おどろきと恐ろしいので涙がこぼれるのをこらえ、やっとな籠に入って、泣きながら退出して来たが、籠が多くの下人たちに担がれ



て出て行くときの、そのおどろきは比べるものがなかった。道では宮廷の女僕たちが黒い服を着てずらりと立ちならんでいて、これもやはり目を見張らせるものであった。

家にたどりついて、籠を舎廊の門から入ると、お父さまが簾をお上げになったが、いつもとちがって礼服を着ていらっしゃる。そのみずからの手でわたくしを抱えて降ろしてくださったが、おそれおおく、つつしむ気持ちでいっばいで、不安にもなり、わたくしはお父さまとお母さまにつかまったまま、涙がこぼれおちるのを禁ずることができなかった。お母さまは服の色を直し、床に紅の敷き物をしいて、中宮の宮殿の方角には四拝し、宣禮宮の方角には二度拝して尊んで、恐縮なさっていたが、そのお気持ちはおしはかるべくもないものであった。

その日から、お父さまとお母さまはわたくしに対することばづかいをただされ、一家の大人たちがわたくしに対してうやうやしく接するようになったので、わたくしは不安にもなり、そこはかたない悲しみは形容できないほどであった。お父さまは心配なさり、わたくしに訓戒をお与えになることばは千言万言を重ねるほどであったが、どのような罪があつてこうしたことになったのか、わたくしにはわからず、お父さまとお母さまのそばを離れることになるのが悲しく、幼いながらも肝腸が溶けてしまうようで、なにごとにも興味がもてなかった。

近い親戚や遠い親戚が、わたくしの入内前の姿を見ようとしてわが家を訪れない者としてなく、遠い親戚は外で応接して帰らせたが、楊州の曾大父<sup>33)</sup>以下にもおめもじしたとき、大父<sup>34)</sup>のおひとりがいましめて、

「宮廷のきまりは厳しくて、お入りになった後は、永遠のお別れになろう」とおっしゃり、また、

「わが身をつつしんで、気をつけて過ごされるように」と続けて、

「名前が鏡である鑑の字と、助ける意の輔の字を、お入りになった後は、お考えください」

とおっしゃった。その洪鑑輔という大父は、いつもは拝見することもなかったが、そのことばを聞くと、自然に悲しくなった。

三度目のお目見えが十一月十三日で、残された日々がだんだん少なくなって、憂鬱で、悲しく、恐ろしく、夜になれば、お母さまの懷で眠り、姑母と仲母のおふたりはわたくしの頭を撫でさすって、わたくしとはなればなれになるのを悲しんでく

ださった。お父さまとお母さまはまた昼夜を問わずにわたくしをかわいがり、いとおしんでくださって、ずっとお眠りになれないほどであった。わたくしは今でもその当時のことを思い出すと、胸襟が痛くなる。

二度目のお目見えの翌日、乳母の崔尚宮と色掌<sup>35)</sup>の金哥孝徳という内人がわが家にやって来た。崔尚宮の風体は大きくて、厳然としており、神経の細やかな他の宮女たちとはどこかちがっていて、歴代に仕えて、礼節もよくわきまえ、よこしまなところがすこしもなかったの、お母さまも気に入って、喜んで応接なさったが、このふたりはわたくしの衣服の寸法をとりに来たのであった。そうして、三度目のお目見えの際には、崔尚宮はふたたびわが家にやって来て、色掌としては文哥大福という内人がいっしょで、貞聖王后から賜わった草緑色のトユタンという布でできた唐衣、松花色の葡萄紋緞のチョゴリ、紫色のトユタンのチョゴリーそろいと、真紅の文緞のチマとムシの上着などをもって来た。

わたくしは幼くて、このようなものを今まで一度も身につけたことがなく、また他人が身につけているのを見て羨んだこともなかった。わたくしの近い親戚に、年ごろも同じような女子がいたが、その家は豊かで、たいせつに育てられ、衣服や装飾品でもっていないものはなかったが、わたくしはそれを羨んで見たことがなく、ある日も、その女子が色鮮やかに刺繍をしたチマを着てわが家にやって来たが、その模様がたいへんきれいだったので、お母さまがご覧になって、

「おまえも着たくはないかい」

とおっしゃったが、わたくしは、

「あのような服があっても、避けて着ない方がいいし、ないのに、わざわざ新たにこしらえて着るのはいやです」

と答えたところ、お母さまは感嘆して、

「おまえは貧しい家の娘とはいえ、どうしてまた、そのようにできているのだろう。おまえが結婚するときには、きっときれいなチマをこしらえて、今日、おまえが幼いながらもいった一言のご褒美にしましょう」

とおっしゃった。そのわたくしが今このように成長したので、お母さまは涙を流しながら、

「美しいチマを着ないで、このわたしがこしらえたチマを着ていこうというのは、考えるだけにとどめておきましょう。宮中に入ればもともと私服は着ないことになっているし、ただ、わたしの作ったものを着てほしいという願いだけはか

なえてほしい」

とおっしゃって、二度目のお目見えがあつて、三度目を控えていたころ、そのこしらえたチマを着せてくださり、感慨もひとしおのご様子であつたが、わたくしもそれを着て、涙を流した。

わたくしが思うに、宗家<sup>36)</sup>の祭壇と外祖父母の祭壇にはなにはともあれお別れを告げるべきであつて、

「ぜひお参りしておきたい」

といったところ、錦城尉<sup>37)</sup>の兄嫁というのがわたくしの仲姑母の小姑にあたるために、つぎつぎと伝わって、宣禧宮の知るところとなり、王さまご自身が、

「参つてくればいい」

とおっしゃつたので、わたくしはお母さまといっしょに一つの籠に乗って、宗家に出かけた。堂叔<sup>38)</sup>は内外に娘がなかつたので、いつもわたくしを連れて帰つては、あるいは泊めたり、あるいはまた送つたりして、かわいがつてくださったが、王さまはそれを知つて、

「大札をいっしょに後見するがよい」

とおおじになつたので、堂叔は国婚が定まつた後には、わが家にやつて来て、お泊りになることもあつたのだつた。

堂叔母<sup>39)</sup>はわたくしを見るなり、喜んで、祭壇に連れて行つて、お参りさせなされた。宗家の祭壇に対しては、子孫は庭で敬礼するのがきまりであるのに、わたくしは正堂に上つて敬礼させられたので、心におどろかないわけはなかつた。その日また、外家に出かけたところ、外三寸の夫人<sup>40)</sup>がわたくしを見て喜んで、手のとどかないところに嫁いでいくのを悲しんでくれた。いとこたちも、それまでは、わたくしが行けば、おんぶをしたり、だっこをしたりして、いつも親しく遊んでくれたのに、その日は遠くにはなれて座り、うやうやしくふるまつたので、わたくしの心は悲しかった。申氏に嫁いだ外四寸のいとこは特別に仲がよかつたから、別れるのはことのほかに悲しかった。

おふたりの姨母さま<sup>41)</sup>にお会いして、家に帰つて来たが、いつしか日が過ぎて、三度目のお目見えの日が近づいて、姑母さまたちが、

「家の中をもう一度すみずみまで見ておいてはいかがでしょう」

とおっしゃって、十二日の晩に連れて行かれた。月の光りが明朗で、眼に当たる風が冷たくて、姑母さまがわたくしの手をとつて、涙をこぼされた。部屋に帰つて、

じつとがまんしていたものの、まどろむこともできなかった。翌日早く、

「宮廷にお参りになるように」

という催促があったので、宮中から三度目のお目見えに着るようにといただいた衣服に着替えた。遠い親族の婦女たちがその日やって来て、別れを告げ、近い親族たちは別宮にまで行をともしることになっていた。祭壇に参って、別れを告げる茶礼を行って、祝文を唱えた。お父さまは涙をおこらえになっているご様子で、だれもがみな、なかなか暇を告げることができない、その情景をどう表現すればいいだろうか。

宮廷に参って、景春殿で休息し、通明殿<sup>42)</sup>にうかがって、三殿<sup>43)</sup>にお会いした。仁元王后<sup>44)</sup>ははじめてわたくしをご覧になって、

「なんとまあ、美しい子だこと。これは国の福というべきです」

とおっしゃった。大王さまはわたくしの頭を撫でて、

「こんなにかしこそうな嫁を、わたしもよくぞ選んだものだ」

とおっしゃった。貞聖王后はたいへんお喜びになり、また、宣禧宮が慈しんでくださったことはたとえようもないほどであったので、子どもながら、小さな心の中で感謝して、仰ぎ見る気持ちがおのずと生まれるのであった。化粧直しをして、礼服である円衫を着て座り、食膳を饗されて、日が暮れかかったので、お三方に四拝して別宮に戻ろうとしたが、大王さまは籠に乗るところまでみずからやって来て、わたくしの手をとらえ、

「気楽な気持ちでいらっしゃい。『小学』を送りますから、お父さまに教えてもらって、じゅうぶんに気持ちの準備をしてから、やって来なさい」

とおっしゃって、名残を惜しんでくださるのを後にして宮廷から退出したが、それからというもの、日がたつのはまことに矢のようであった。

宮人たちが左右についてはいたものの、わたくしはお母さまを離れて、どうしてやっていけるかと愕然として、夜中に悲しくてたまらなかったが、またお母さまの心中はどれほど悲しみでいっぱいであつたらう。乳母の崔尚宮の性格は厳しくて、私情がなく、

「国のきまりとして、ごいっしょはできません。どうぞ、お下がりください」

とあって、お母さまを行かせて、わたくしはそれを追うこともできなかったが、この乳母にはそうしたやさしい人情というものがあった。

翌日、『小学』を送ってくださり、毎日、お父さまに教わることとなった。堂叔

もその場にいらっしゃって、仲父とお兄さまもいらっしゃった。叔父と季父は子どもでいらっしゃったが、やはりそこに列席していらっしゃった。

先の大王さまはさらに教訓の書物を送ってくださり、『小学』を学ぶあいまに読むようにとおっしゃったが、その書物というのは、孝純王后<sup>45)</sup>がやって来られたおりに作られた御製であった。

別宮に備えておかれた家具調度、屏風や帳などはすばらしいもので、装飾品の中には、日本の真珠の大きな茄子の形をしたものもあったが、それは宣禧宮が下さったものであった。最初は貞明公主<sup>46)</sup>のものであったが、それが孫の趙氏の夫人に伝わって、その家が売り立てることがあったので、宣禧宮に仕える宮人が因縁があって買ったものであった。わたくしは公主の子孫にあたるものとして、宮廷に入ることになり、ふたたびわが家の宝物をもつようになったというのも、決して偶然ではなかったろう。

貞献公は書画を大いに好まれ、四幅の刺繍をほどこした屏風をもっておられたが、庚申の年(1740)にお亡くなりになった後、仕えていた下人がもって行ってしまい、ことばたくみに宣禧宮の内人にもちこんで買い取らせた。宣禧宮はそれを表装しなおして、寝室に立てるようにと下さったので、季姑母がそれを認めて、

「祖父のところにあったものが、禁中に入ってきて、今日、孫娘の寝室に置かれているのは、まことに不思議なことだ」

と賛嘆なされた。

また、宣禧宮の八幅の刺繍をほどこした龍の屏風が出されていたが、お父さまはそれを見て、

「この屏風の中の龍の光彩は乙卯の年(1735)の六月十七日のこの子の誕生のときに夢に現われた龍の光彩と同じで、そのとき夢に見た後、思い出すこともなかったが、今この屏風を見るに、まさしくあのときの龍にちがいない」

とおっしゃった。おおよそ、繡画にふたたび巡り会ったこと、そして屏風の龍の光彩がかつての夢を彷彿させたことがきわめて異常であったので、一座の者で感嘆しない者はなかった。その龍の光彩というのは、黒い鱗甲の輪郭を金糸で縫ってあり、黒と金が混ざりあって、たがいに調和していた。お父さまは、

「黒龍の形そのものではなくて、その気配が似ているのだ」

とおっしゃって、神妙なこととお考えになった。わたくしは別宮で五十余日も過ごしたが、その間、三殿からは尚宮を来させて、わたくしの安否をお尋ねになった。

その尚宮がやって来ると、大王さまの意を帯びてのことではあり、実家の者を頼んで大いに歓待したが、そのありさまはたとえようのないほどであった。すなわち、尚宮がやって来れば、盃とお膳を用意し、それに礼官がついてくれば、さらにご馳走を用意したために、後々までこのわたくしどもの甲子の年（1744）の嘉礼の盛んだったことが例として引き合いに出されるほどであった。

わたくしが別宮にとどまっているあいだ、お祖母さまに病患があつて、大婚が迫っているにもかかわらず、その症状は軽くはなく、お父さまとお母さまははなはだご心配であった。そのときの状況といえば、家の中は平穩ではあつても、わたくしを手放すという悲しみがわだかまって、さまざまな気掛かりがとめどなく起こっていたはずなのに、なにごともないかのように別宮に入って来られた穏やかな空気を忘れることができない。お祖母さまは居所をお替えになることになって、お父さまがみずから背負って籠に乗せ、お送りになったが、この消息を宮人たちが聞いて、たいへんに称賛して、宮廷ではお父さまのお祖母さまに対する孝行の念のはなはだ強いのを噂しあつた。天のお恵みともいうべきか、お祖母さまの病は回復して、一国と一家の万幸であつたが、今になって思うに、そのときのように慌てたことはなかつた。

正月初九日に嬪に冊封するということがあつて、十一日には嘉礼となり、わたくしはお父さま、お母さまにお別れする日が迫って、情理としてこらえることができず、一日を泣いて過ごした。お父さまとお母さまもまた人情としてお悲しみにならないわけではなかつたが、その悲しみにも耐え忍ばれた。お父さまは教訓なさつて、

「人臣の家が外戚となれば、栄華がともない、栄華がもたらされれば、家中が盛んになり、そして、家中が盛んになれば、禍を招くこととなる。わが家は都尉の子孫で、国恩を世々に受けることきわまりなく、国のためには、熱湯に飛び込み、火を踏むことも決して辞さない。だが、白面の書生が一朝にして王室の縁戚に連なつた。これは福のきざしではなく、禍のきざしというべきであつて、今日より憂え恐れて、死ぬところを知らない」

とおっしゃつて、わたくしの座臥行動についてお教えにならないことはなかつた。

「宮廷にお入りになれば、三殿にお仕えすることに気を配つて、孝誠につとめ、東宮にお仕えするにもかならず正しくして、ことばをいっそうつつしんで、国と家に福をもたらされるように」

そうおっしゃつて、戒めなさることが千言万語であつたが、わたくしはつつしん

で承りながら、涙を禁じえなかった。心が木石でなくて、どうして感動しないいでられようか。醮礼という酒杯の礼があって、お父さまとお母さまからまた戒めをうやうやしくうかがったが、そのとき、お父さまは紅色がかつた公服と帽子を身につけ、お母さまは円衫を着て大曲げを結っておられた。一家の者たちがまた別れのためにやって来て、宮中の人々が数多く出入りしたが、わがお父さまとお母さまが内外のことにつけて執り行われる礼が少しも節度になかないということがなく、莊嚴かつ端重であったから、見る人が、

「国はいい親戚をもったもんだ」

といていた。醮礼の後、宮中に入って、大礼を執り行ったが、十二日には朝見をなさって、大王さまが、

「わたしはすでに結納を受け取ったが、舅として訓戒を与えることにしよう」とおっしゃって、

「世子に仕えるのに、常に和やかであれ。声と表情は軽々しくなく、たとえ眼につくことがあっても、知らないふりをして、知っているそぶりを見せてはならない」

とお続けになったが、わたくしはその戒めをうやうやしく拝聴したのであった。

その日、大王さまは通明殿に貞聖王后と宣禮宮をおわたしして、お父さまを引見なさり、ねんごろにおことばをおかけになって、盃をお与えになった。お父さまはそれを飲み干すと、残った酒を袖でぬぐいとられたが、香りがするように橘の種を懐になさっていたのだった。大王さまはわたくしに、

「おまえの父親は礼をよくわきまえている」

とおっしゃった。お父さまはそれを知って感泣なさり、退出してから家の者に伝えて、

「聖恩はまことに甚大で、以後、わが家の者は死によってでもこの恩に報いよう」

とお誓いになった。

翌日、仁政殿<sup>47)</sup>で進賀をお受けになるとき、わたくしを百官に紹介して、また、

「実家の人々に見物させるようになさい」

とおっしゃった。その朝賀が終った後に、わたくしが大造殿<sup>48)</sup>にお見舞いにうかがったところ、貞聖王后はお母さまを引見して、恩典をお与えになることがまことに丁重で、応接なさるご様子をご自分の家族に対するようであって、

「女子をこのように美しく育てあげて、国に慶事を見せたのは、大きな功績と申せましょう」

とおっしゃった。仁元聖母は尚宮に丁重に応接させるようにして、みずからは引見なさらなかったが、その恩恵は大きく、光栄ははかりしれなかった。宣禮宮ともさっそくお会いして、姻戚のあいだの交わりが実の親子のように和気藹々としていた。お母さまはなごやかで、ことばは簡潔な中にも愛情が厚く、へりくだっていらっしゃったので、宮中では称賛がしきりであったから、そうしたことから、乙亥の年（1755）のお母さまの葬式の後、貞聖王后と宮廷の年老いた内人たちが悲しみ、泣かない者はなかったほどで、それほど人心を得ていらっしゃったのであった。

通明殿で三日の夜を過ごし、儲承殿<sup>49)</sup>にやって来て、私が過ごすことになる観熙閣<sup>50)</sup>に入る様子を見て、お母さまは寂しそうな顔色をいささかも見せず、泰然と別れをお告げになって、

「お三方<sup>51)</sup>があなたをかわいがり、王さまも娘のようにいつくしんでくださるが、ますます孝行を尽くして、家と国の福となるように勤めなさい。父母のことをいささかでも思うなら、このことばを肝に銘じるようになさい」

と戒められた。籠に乗るときになって、涙を飲んで、内人たちにくれぐれもとわたくしのことをお頼みになるご様子がねんごろであったので、宮人たちは感嘆して、

「お母さまの挙動を拝見したら、どうしてそのご依頼をむげにできよう」

といったものだった。

十五日には、璿源殿<sup>52)</sup>にお参りして、また十七日には宗廟<sup>53)</sup>にお参りもして、わたくしが幼いながらも大礼をつつがなくこなし、大曲げを結び、正装をして、さしたる失敗をすることもなかったので、大王さまは称賛され、宣禮宮も喜ばれたので、わたくしもいっそう感激した。

お父さまは一日と十五日には参内なさり、ご命令があって拝謁なさったが、いつも長く宮廷にとどまられることはなく、

「宮中のきまりは厳しく、宮外の人間が長くとどまることはできない」

とおっしゃって、すぐに帰って行かれたが、やって来られるたびに、こんこんとわたくしを諭されたことばはかぞえあげることのできないほどであった。やって来られると、世子にお会いになって、学問を勧め、特に古文と歴史を学ばれるように熱心にお勧めになった。景慕宮<sup>54)</sup>もお父さまに應接なさり、したしくお思いになることは他と異なっていた。お父さまも仰ぎ見て尊くお思いになって、誠をお尽く



しになることいかばかりであったろうか。

甲子の年(1744)の十月、お父さまが科挙に及第なされたので、景慕宮は  
「妻の父親が科挙に通った」

とおっしゃって、たいへんお喜びになった。わたくしが別の建物にいたおりのことで、そこまでわざわざいらっしゃったが、喜色を満面にたたえておられた。当時、慶恩の国舅<sup>55)</sup>の家でも科挙は受けず、また、達城のご実家<sup>56)</sup>でも科挙を受けず、顕達なさることはなかったから、世子は年はお若いながら、わたくしの実家が科挙に通ったことを奇特なこととお考えになったのだった。発表の後、宮中に行かれ、世子はお父さまがいただかれたお祝いの花に触れてお喜びになった。そうして、大王は昨年(1743)の癸亥の科挙に及第しなかったことを気の毒にお思いになり、今回の科挙での及第を大いに喜んでくださったが、仁元、貞聖のお二人の聖母は、

「実家のものが科挙に及第したのは、まことに国の幸である」

とおっしゃって、わたくしを呼び、お祝いを述べられた。貞聖王后はご自身のご実家が党争による風霜を経験して<sup>57)</sup>、誤った論におちいられることなく、わが家と同じく老論を奉じて、親戚のようであったから、わが家の婚姻の嘉礼をたいへん喜び、さらには科挙の中でも文科での及第であったことを喜んで、涙をお流しになるほどで、お心の中での喜びはまことにはかりしれないほどであった。

お父さまはいつも世子の学業のお手伝いをして、ためになる事柄や故人の文を書いて差し上げた。また、世子が文章を書いてお送りになれば、その評論をしてさしあげ、世子は侍講院の學員にお学びになるよりお父さまにお学びになることの方が多かった。お父さまが娘婿の世子に千万年の太平聖君となられることを願うまごころは、ほかの臣下のだれにまねができたろうか。

わたくしは幼くして宮中に入って、拝見したところ、世子は気品が英偉であり、孝誠が至極であって、大王さまを恐れ畏んでいらっしゃる上に、まごころをもってお尽くしになるご様子は神々しいほどで、また貞聖王后に向けられた孝心というものもみなみならざるものであったが、実の母親に対してのまごころはさらに表現のしようもないほどであった。実母の宣禧宮は生まれつき仁愛に富んでいらっしゃったが、おごそかな気品に満ち、みずからの腹を痛めた子どもを愛しながらも、教訓は厳しくなされた。その子が王世子となるに及んでは、あえて母親としてふるまうことをせず、うやうやしくお接しになり、お教えることも愛情をこめながらも

厳しくなされたので、これに対して、世子もはなはだ畏まっていた。また、宣禮宮はわたくしを世子と変わらずにお愛しくくださったので、卑しいわが身に過分の思し召しをいただくたびに、心に不安を覚えた。

わたくしは宮廷に入ってから、ご機嫌うかがいをおろそかにすることなく、仁元・貞聖の両聖母には五日に一度、宣禮宮には三日に一度というきまりになっていたが、ほとんど毎日のようにうかがって、お仕えした。その際は、宮中のきまりが厳しくて、礼服を着ていなければ、あえて拝謁することができず、日が遅くなればまたできないことになっていたので、暁のご機嫌うかがいの時間に遅れることないように、ぐっすりと眠ることもなかった。わたくしは宮廷に入るときに、乳母のばあやと侍婢一人を連れて来た。侍婢の名は福礼といって、お父さまが小科をお受けになった後に特別にお与えになった侍婢であり、わたくしは小さいときからこの侍婢と親しんで遊び、離れることがなかったが、たいへん気が利いていて、忠誠を尽くし、決して身分の卑しい人物のようではなかった。ばあやの性格もまた順直で勤勉であったので、わたくしはこのばあやと侍婢に頼んで朝早く起こしてもらうことを一大事にして、あえておろそかにせず、厳冬、盛暑といえども、また風雨や大雪の中といえども、ご機嫌をうかがうのに、一度も時間に遅れることはなかったが、それはこの二人の功績というべきであった。

その後、ばあやはわたくしのたびたびのお産の世話をし、その功が少なくはなかった。その子孫が代々手厚く料布を受け取ることができるようにしてやったが、八十を過ぎる寿命をまっとうして死んだ。福礼はわたくしに手足のごとくに仕え、わたくしの心中の悲患苦楽をいわずともよく理解して、五十年のあいださまざまな経験をわたくしと分かち合った。庚戌の年(1790)の大慶<sup>58)</sup>には、産後のお食事にお仕えして、王さまは尚宮に任命なされたが、七十を越えてもすこしも筋力がおとろえず、わたくしに仕えるのに、童女のころと変わらなかった。ばあやと福礼はわたくしによく仕えたことを徳として、一生を健やかにまっとうしてほしいと思ったことであった。

昔の宮中のきまりというのは、どうしてあんなに厳しかったのだろうか。お見舞いのほかにもいろいろと難しいことがあったが、わたくしはそれを決してつらいとは思わなかった。このことがまた、昔からのしきたりをなおざりにしない人間だとして、感心していただいたようであった。

小姑は大勢いらっしゃったが<sup>59)</sup>、わたくしをかわいがってくださった。わたく

しは地位相応に応接したものの、ひとつとして行実を学んだわけではなく、ただ孝純王后にしたがって身を処した。王后とわたくしは年が隔たっていたものの、たがいに学びあって、仲のよさは格別であった。多くの翁主の中では、和順翁主は温厚でいらっしやり、和平翁主は柔順でいらっしやって、わたくしに應接なさる様はねんごろであった。下の二人の小姑<sup>60</sup>)は年ごろがたがいに似たようなもので、尊貴なお子たちとして遊び道具はすべてそろっていたが、わたくしはいっしょになって遊ぶことはしなかった。目の前に遊戯の道具が多くあっても、手を触れるのを好まなかったので、宣禧宮がいつもねんごろに、

「心の中では遊びたいさかりであっても、それを我慢して、遊ばないというのは、大驚である。宮廷に入って来た道理をよくわきまえて、幼い小姑たちといっしょに遊びほうけてはいけません」

と訓戒してくださったのを、どうして忘れることができようか。

癸亥の年(1743)にわたくしが宮廷に入ったとき、仲弟<sup>61</sup>)は五歳で、叔弟<sup>62</sup>)は三歳であったが、兄弟ともに早熟で、双生児のようであった。お母さまはわたくしの嘉礼の後、一年に一、二度宮廷にやって来られるおりには、兄弟を連れて来られた。大王さまはかわいがって、いつもわたくしのいるところいらっしやると、弟たちを前に立てて、およびになると、巡令守<sup>63</sup>)のような声で大きく応答したのをかわいらしいとお思いになった。その後、仲弟が成長して、丙戌の年(1766)に登科したが、大王さまは、

「巡令守の応答をした子が及第した」

とお喜びになって、

「領相はいい子を育てたものだ」

とおっしゃり、儒臣たちと文章を読めば、手をたたいて、

「よく読んだ」

とほめてくださった。

景慕宮はいっそうかわいがってくださって、弟たちが宮中にやって来たときには、片時もそばを放さず、左右に連れて歩かれた。仲弟が九歳のとき、景慕宮は宗廟にお参りになったが、平天冠<sup>64</sup>)が横にあったのを、笑いながら、

「おまえがかぶってみたら」

とおっしゃったのに対して、頭を抑えて、

「臣下の身でかぶることはできません」

と申し上げたので、よくわきまえているのを奇特にお思いになったが、仲弟は恐れ多くて、冷や汗を流したことであった。

この間、ほかの子どもたちに比べれば、どれほどにか早熟でなかったことがあろうか。宮中のきまりとして十歳を過ぎれば、男子が宮中で宿泊することはできないようになっていたが、ある日、景慕宮が何度も呼ばれたので、叔弟が差備門までやって来たところ、宦官がなにごとかをいって、無礼だったので、叔弟は痛憤して入らなかった。景慕宮はみずから差備門までやって来られて、

「おまえはこのように剛直では、わたしをどうやって助けてくれるのか」とおっしゃって、扇に詩文をしたためて叔弟にくださったのが昨日のこのように思われる。景慕宮はその性質が謙虚で、穏和でいらっしゃり、わたくしはひとえにお慕い申し上げた。

お父さまは科挙に及第して、七年ほどで大将にまでおなりになったが、その功名は赫然と輝き、人びとは、

「王室の近親だから、当然だ」と噂していたが、宣禧宮はわたくしに用のあるとき、

「あなたの父上が掌議として崇文堂にいらっしゃったとき、大王さまは初めてご覧になって、『今日、実に立派に文章を書く人物を手に入れた。掌議の洪某こそ、その人物だ』とおっしゃったのですよ」

と耳打ちなされた。このことで推量しても、大王は、この最初の時から、お父さまに目をかけなされたので、どうしてただわたくしの父親だからというだけで、重用なすることがあったろうか。以後、お父さまは経済および軍事など国家の重大事に当たられて、昼夜に心力を尽くし、寝食を廃して、私事を忘れ、国家の事に没頭なさり、わたくしを見ても、いつも、

「聖恩がはなはだ重く、それにどう報いればいかわからないほどだ」とおっしゃっていた。

わたくしは早く妊娠して、庚午の年（1750）に懿昭を産んだものの、壬申の年（1752）には死なせてしまい、三殿と宣禧宮のみなさまが大いに哀痛なされた。わたくしが不孝なためにこうした無残なことになってしまい、罪深く感じていたが、その年の九月には天が哀れんだのか、主上<sup>65</sup>がお産まれになって、わたくしの小さな福の力でこの年に慶事があったのは予想外のことであった。主上がお生まれになって、その風采は英偉であり、骨格は奇異で、まことに龍鳳の姿、天の日のよう

であった。大王がこれをご覧になって、大いに喜ばれ、

「この子の儀容は異常で、凡俗を超えている。きっと祖先の神霊の思し召しであろう。宗廟社稷の願いのこもった子だ。わたしは老境にあって、今日このような慶事を見ることなど、どうして予想したであろうか」

とおっしゃった。そうして何度も感嘆なさって、

「あなたは貞明公主の子孫として、国の嬪となり、そうして、ご自分の身にこうした慶事をご覧になった。あなたの国家にとっての功績ははかりしれない」

とおっしゃり、さらに続けて、

「この子をどうかちゃんと育てるように。衣服を儉朴にすることが福をたいせつにする道理ですぞ」

とおっしゃった。わたくしはそのおことばを聞いて、どうしてないがしろにすることができたらう。

わたくしはそれまで子どもを産むには年が若く、母となる道理をもっていなかったが、今上を産んで、春に王子を亡くして痛惜したのが、秋にはふたたび国の慶事となり、全宮中の喜ぶことは最初の王子の誕生のときに比べると百倍するほどであった。お母さまは臨月の前にやって来られ、お父さまは宿直なさって、七、八日目にこの慶事を見たのであったが、両親のお喜びようといったら、極まりがないくらいであり、またその子が異常なほど立派であったこともお喜びになり、わたくしにお祝いをおっしゃった。わたくしが二十にもならない若さで、晴れがましく喜ばしいことは人情として当然ではあったが、子が授かったのはわたくしの身の土上の天の思し召しであると思われ、心に不思議なことと考えた。

辛未の年(1751)の十月、景慕宮は、夢の中で龍が寝室に入って来て、如意珠をもてあそぶのをご覧になった。異常なきざしであるとお考えになり、その晩のうちにすぐに白綾一幅に夢の中で見た龍を描いて、壁の上にお掛けになったが、そのときの宮の春秋は推し量るに十七でいらっしやう。宮は不思議な夢を見たものだといふかられたが、

「子どもを得るきざしであろう」

とお考えになった。すでに十分に成熟した大人であったし、描いた龍のできばえもすばらしかったので、はたして後の主上を得るきざしの夢であるとお考えになったのだ。宮はいつもは寡黙で、きまじめでいらっしやうだったが、幼な子を見ると、いつもお笑いになって、わたくしを祝ってください、

「こんな子どもをもったからには、なにを心配することがあろう」  
とおっしゃった。

その年に紅疫が大いに流行して、翁主がさっそくかかられたので、大王さまは薬院に、

「東宮と玄孫をちがう所に避難させよ」

と命令なさったが、そのとき、玄孫の産後三七日にもなっていなかったので、お移しすることがむずかしく、かといって、大王さまのご命令に背くこともできなかった。景慕宮は養正閣にいらっしゃり、元孫は樂善堂にお移したが、三七日とはいえみどりごのからだは十分に大きくて、遠いところへ移すのにいささかも心配がなかった。まだ乳母は決めていなかった。年老いた宮女とわたくしのばあやに任せましたが、すでに景慕宮は紅疫にかかっていらっしゃり、内人たちもまたみなが紅疫にかかっていて、面倒を見る人がないので、宣禧宮はみずからやって来てお世話なさり、外ではお父さまが宿直して見守ってくださった。症状は順調に回復し、熱があったものの、お父さまがつきっきりで看病なさった、その精誠はどう記録できるものであろうか。病がお癒えになった後、お父さまが書物を読んでさしあげたところ、

「文章を読む声がすがすがしい」

とおっしゃったので、昼夜におそばに仕えて読んでさしあげた。そのとき、お父さまがお読みになった書物のすべてを記憶してはいないが、諸葛亮の『出師表』を読まれて、

「昔から君と臣の出会いで漢の昭烈と諸葛亮のようなものはなく、私はこの文章を読む度に賛嘆いたします」

とおっしゃって、また昔の賢君と名臣のことなどを話してさしあげたので、たとえ病患のあいだのこととはいえ、その親しい付き合いは格別であった。景慕宮の紅疫がほとんど癒えた後に、つづいてわたくしが病にかかった。産後にこのような疫病にかかって、症状は軽くはなかったが、産まれたばかりの今上も発疹して、こちらの方は、そのとき三月になったばかりだったのに、大きな子どもと同じように、順調に回復なさったようだった。わたくし自身の病は重いので、どうしたものかと心配して、宣禧宮はわたくしには玄孫の症状を子細には知らせないようになさったから、わたくしはなにも知らずに過ごした。お父さまはわたくしのいるところにやって来ては、また玄孫のいらっしゃるところにも往来なさったが、そのご心配はどう

形容すればいいだろうか。ある晩のことなど、疲れてお這いになって、歩くこともできないほどだったそうで、そうした事情というのも、わたくしの病がようやく癒えた後になって、はじめて知ったことで、お父さまのご苦勞とご心配はさぞかしであつたらうと心苦しく思うのであつた。主上の紅疹をばあやひとりが看病して、臣下ではお父さまがひとりで面倒を見られた、その焦燥はどれほどであつたかと思うと、紅疫がすっきりと回復なされたことがまことに不思議なことに思われる。

主上は紅疹の後、すくすくとお育ちになり、満一歳のころにはよく字を知って、その早熟の様子は凡兒とははるかに異なつていた。癸酉の年(1753)の初秋に大提学の趙観彬を大王みずから問罪なされたとき、宮中のみなが恐れていたのに、ご自身でその場に行かれ、「大声を出すな」とおっしゃつた。二歳のときにはすでにこうした異常な知覚のおありになることがわかつたので、三歳のときには輔養官<sup>66)</sup>を定めて、四歳のときには『孝経』を学び始められたが、少しも幼な子のようにではなく、文章を好まれたので、教えるのにいささかの苦勞もなかつた。大人のように早くに櫛で髪を梳き、洗面し、書物を置いて、お読みになつた。六歳のとき、儒生たちを呼んで宮中で講書会をなされたとき、大王は主上もお召しになつて、龍床の前で文章をお読ませになつたが、その声が清らかで、すらすらとお読みになつたので、輔養官の南有容が、

「仙童が天降つて、文章を読んでいる声だ」

と申し上げたので、大王ははなはだお喜びになつた。このように主上の早熟のご様子は古今に例がないほどで、幼いながらも、景慕宮に対して口に出さない中にも孝行のことが数多くあつたが、いったいだれがお教えしたことであつたらうか。世間の人びとはまさしく天人であると噂したが、實際、ありふれた人間でどうしてそのようでありえたであらう。

わたくしは若いうちにこのように優れた幼な子を得て、また甲戌の年(1754)には長女の清衍を産み、丙子の年(1756)には次女の清瑤を産んだ。清衍は氣質が柔和で寛厚であり、清瑤はまた穏和で慎み深く、ふたりは掌中の双玉というべきであつた。わたくしの運命をだれが羨まないでいられたらう。実家の父母は善良でいらつしやる上に、功名と榮華が光り輝いており、兄弟姉妹にも恵まれて、なにひとつとして心配がなかつた。

お母さまが宮中にやつて来られるときには、季妹<sup>67)</sup>と季弟<sup>68)</sup>を前に立てて来られた。季弟は父母の晩生の子で、たいへんなかわいがりようであつたが、その性格

も忠厚かつ寛弘であって、幼いながらも、末は大きな器となる気象があり、主上のもとに連れて行くといへんかわいがってくださったので、わたくしはその将来を期待する気持ちが小さくはなかった。わたくしが宮中に入った後に、お父さまとお母さまはわたくしを忘れがたく、女子をお産みになられた。それが季妹であったが、人ごとにその子の誕生を祝って、わが家では娘の生まれたことを幸いなことに思い、全家中の喜びとみなした。わたくしも、わたくし自身がお父さまとお母さまの膝もとに形見としてとどまったような気がして、うれしかった。その気品は美しく、玉のようで、性行が孝友かつ婉順であったから、お父さまとお母さまも寵愛なさり、兄弟姉妹の愛情が自身に過度に集まっても、決して驕ることがなかった。宮中にやって来ると、両聖母と宣禧宮はみなお喜びになって、通明殿での大礼の時も、宮廷中の内人たちみな抱いてみて、あたかも明るい月と蓮の花を見るようであったことから、その資質の優れていたことが想像できよう。わたくしがかわいく思うのもただ姉妹の情からというのではなかった。わたくしにつきまとして離れず、庚午の年（1750）、五歳のときに、よくお母さまの後についてやって来て、わたくしがお産したことを聞いて、

「国父がお喜びになり、わが家のお父さま、お母さまもみなお喜びです」

と、まるで大人のようなことをいうので、聞く者は賢いことをいうものだと感心した。孝純王后は装飾品をつくってくださったが、その後、その装飾品をつけていなかったのも、

「あなたは どうしてあの宝石をつけないのですか」

とお尋ねになると、

「くださったものももったいなくて、お后さまがいらっしやらず、ご覧にならないときには、つけません」

とお答えしたのであった。

壬申の年（1752）の三月に国に悲しみがあつたが、秋に宮中にやって来て、わたくしを見て、涙を流し、死んだ子を育てた乳母の手をとらえてともに泣いた。そのとき七歳であったが、どうしてそのように大人びていたのだろうか。同じ壬申の年の九月の大慶のとき、お母さまがやって来られたときについてきて、主上が誕生したばかりのわたくしを見て、

「この坊やは丈夫に大きくなって、お姉さまには心配をかけますまいよ」

といったので、左右がそのことばにうなずいて笑った。お母さまは、



「子どものことばとは思えない」

とおしかりになったが、わたくしが、

「この子の今のことばはなによりで、どうかしからないでください」

といて、とめた。このとき、宮中での福祿が綿々と続き、家はまた繁盛して、兄弟姉妹たちすべてが余慶にあずからないということはなかったから、宮人たちはみなわたくしを仰ぎ見て、お祝いをいわないものはなかった。

景慕宮はお母さまを応接なさることが、普通の姑のようではなく、ねんごろであったので、お母さまは仰ぎ見て、畏れ多く、もったいないことと思ひ、あえてただの娘婿のようには接しはしなかったが、その精誠はいかばかりであったろうか。お母さまが宮中にやって来られたときは、たとえ景慕宮はお怒りになっているようなことがあっても、

「いえいえ、たいしたことではないのです」

とおっしゃって、すぐに顔色をお変えになった。

甲戌の年(1754)に清衍が生まれたときにも、お母さまは五十余日のあいだ宮中にとどまり、いつもわたくしのそばにいて過ごされたが、景慕宮が親密におつきあいくださったので、お母さまはいつも感謝なさっていた。

悲しいかな、景慕宮の気質はすぐれ、学問も進み、その氣象も気品もほかにないほどすべてにわたって立派でいらっしゃったが、不幸にも、壬申(1752)と癸酉(1753)のあいだに病にかかられた<sup>69)</sup>。わたくしの心配は無量で、お父さまとお母さまの心中でのご心配もいかほどであったろうか。お母さまは昼夜に心労なされて、みずから祈禱し、名山大川にまごころを尽くして祈られ、晩にはまどろむこともなく合掌して、天にお祈りをされたが、これはみな不肖のわたくしに代わってのことであったろうか。

国のために至極のまごころがなければ、どうしてこのような心配をなさったろう。

わたくしの長兄は、お父さまとお母さまが早く得られて、正しく教訓なさることが厳しくて、文章も早く習得なさり、士気も高邁で、行実も峻潔でいらっしゃった。十五歳となるや、厳然として大ソソビのようにふるまわれた。家中のものはみな尊敬して、従僕たちも立派なご主人として敬ひ、同輩たちもあえて侮ることがないような、みごとな丈夫としての風格がおありになったので、貞献公はいつもわが家の大棟梁とみなしていらっしゃった。お兄さまは癸亥の年(1743)に結婚しよう

として、わたくしの大婚のことで延び、乙丑の年（1745）にやっと成婚なされた。そのお相手というのは驪陽府院君<sup>70</sup>の曾孫にあたる娘で、朝賀の資格をもつ従三品<sup>71</sup>の孫女であり、一世の名門の女子であった。幼いときから宮廷に出入りして、三殿の寵愛をほしいままにしていたから、わが家の嫁になられることを知って、お喜びになり、嫁入りのときにはわざわざ尚宮をおつかわしになり、両聖母はその日の光景をお尋ねになったほどであったが、姻親のあいだでの誼みを厚くすることをよくわきまえておられた。お兄さまが初めて宮廷にお出かけになったとき、資質が清麗で、気品が高秀であり、その威儀と礼儀正しさが善を尽くして美しかった。すべての戚臣の家の子どもたちのあいだに立つと、たとえば、鶏の群れの中に鶴がまじっており、石ころの中にきらりと光る玉があるようでもあって、宮中のみなの眼がおどろいて見つめ、称賛した。おふたりが連れ添われたのは実に短く、長いあいだではなかったが、天の結び付けたようなお似合いの夫婦であり、わが家の宗孫・宗婦はおおぜいの中で特に優れていらっしゃったので、お父さまとお母さまのこれを重んじになることも、また世間に類のないほどであった。続けて女子が生まれ、長く男子が生まれなかつたので、お父さまとお母さまははなはだご心配になっていたが、乙亥の年（1755）の四月に、おまえ<sup>72</sup>、守栄が生まれて、むつきの中であっても、骨格が秀で、容貌が冠玉のようであったから、お父さまとお母さまがおかわいがりになるご様子は万金を見るにも過ぎ、期待なさることは千里を駆ける駿馬に対するようであった。わたくしにみずからお手紙を書かれてお喜びであったが、それはお父さまとお母さまの後継ぎがまさに生まれ出たことで、わが家にとっての喜びははかりしれなかつたのだ。

その後、大王がおまえをご覧になって、たいへんかわいがってくださり、名前を守栄とつけてくださったが、幼くしてこのような光栄はなく、主上もまたたいせつにしてくださったが、おまえのように子どもの時分からこれほどの恩恵をいただいた者がいったいどこにしよう。

おまえが生まれてからというもの、わが家にはなにも思いわずらうことなどはなくなつたはずなのに、悲しいかな、乙亥の年（1755）の八月にお母さまの葬事があつて、だれであっても母親を失う悲しみはたとえようがないものだが、わたくしのしていたらくといえ、天地の間にひとり取り残されたようで、悲しみのあまり世界に呆然として、どう生きていけばわからないほどであった。お父さまはすばらしい配偶者を失われた悲しみの上に、お母さまを亡くしたわたくしのことをいっそ

う悲しんでくださったので、わたくしは身体をそこなわないように、お父さまのためにも気をつけたが、この限りない悲しみにどうして片時でも耐えられたろうか。発葬の日、宣禧宮はみずからやって来られて、わたくしをなぐさめてくださることが、まるで実母のようで、こうしたいつくしみは普通の家の姑と嫁のあいだでもないことなので、わたくしは感動して、あえて悲しみを押し隠すことをしなかった。葬事をすませて、ご挨拶にうかがったとき、両聖母はわたくしの手をとらえ、涙を流しながら、お母さまを惜しんで悲しんでくださった。深い悲しみの中にもこうした光栄を受けることがあったのだった。

わたくしはこの悲しみをこらえて、かろうじてこの世にとどまっていたものの、真実に生きようという意志もなかったので、大王はあまり悲しまないようにとおっしゃり、貞聖王后と宣禧宮は、

「執葬のことがすでに過ぎており、衣服の礼節が国の礼節とはちがっています」とおしかりになったので、わたくしはさらに喪に服してまごころを尽くすことができないのを悲しんだ。

仲弟の妻<sup>73)</sup>と叔弟の妻<sup>74)</sup>は、再従兄弟として、相嫁となってやって来たのは、めずらしいことであった。仲弟の妻は賢淑かつ柔順であり、叔弟の妻は温順かつ孝友であったので、お父さまとお母さまはたいへんお喜びになった。まもなくお母さまがお亡くなりになったが、そのとき、ふたりの嫁の歳は十七と十五であって、どうして成人としての心構えがあったろう。さらにかわいそうであったのは、季弟の歳が六歳だったことで、これはお父さまがそのお母さまを亡くされたのと同じ歳で、悲しみを知るか知らないかの年であった。季妹はもの心がついていて、たいせつな人を失った深い悲しみの表情をたたえ、季弟をかわいそうに思っ、たがいに寄り添って慰めあう様子は大人のものであった。季弟はお祖母さまの愛を受け、季妹は兄嫁が後見なさったので、衣服飲食の心配はいささかもなかったが、弟妹の心細く頼るところのないありさまを、わたくしは片時として忘れることはなかった。季妹の手紙には母親を亡くした悲しみが紙面いっぱい書いてあり、わたくしはそれを見るたびに、その一字一句ごとに涙が一滴こぼれるのだった。

丙子の年(1756)の二月、お父さまは広州留守におなりになった。お別れするのが悲しく、とりわけお祖母さまを連れて行かれることになって、わたくしはお父さまと同然に考えていたので、いっそう悲しかった。その年の閏九月に、わたくしは清窟を産んだが、お産のとき、お父さまはお母さまの亡くなったことをあらためて

実感なされた。わたくしの陣痛はひどかったが、臨月の身体を世話する人もなく、喪中の質素な食事でも長かったので、精魂もつきはて、危なっかしい状態であった。大王は心配なされて、お父さまに命じて、薬を多くくださり、ようやくのことで無事に出産することができたものの、悲しみが骨を刻むかのようで、産後の虚弱がはなはだしかったので、お父さまはたいへん心配なされた。その月にお父さまが平安監司となって、旅立たれる心中はまたいかほどであったことか。私的な情としてはつらいものではあったが、王命は重く、支度を急いで赴任なされた。その年の十一月には景慕宮が痘疹を患われ、お父さまはいつもみずからが微力であることを残念に思っていたらしかったが、千里の関外でこの消息を聞いて、昼夜に冷所で起居してお祈りなされて、ソウルでの安否を聞こうと焦心のあげく髭が真っ白になったほどであった。幸いにも、病いが癒えて、すっかりお元氣になられたのは、宗社にとつての莫大な慶びであった。その後、百日もならないうちに、貞聖王后がお亡くなりになったが、そのとき、景慕宮のお哀しみになる孝心がご立派で、だれもが感服した。因山<sup>75)</sup>の際、黎民士庶がそれぞれ景慕宮のご哀惜になるご様子を拝見して、感泣したものであった。そのころ、国事はしだいに思わしくなくなって、痘病の名残も久しい間とどまった。

お父さまは五月にはソウル勤めに戻って来られることになり、父娘がはなればなれになって、また会う喜びは大きく、さまざまな心配があったが、たがいに顔を見交わすと、ただ涙がこぼれるだけであった。十一月に大王が激高なされる事件があったが<sup>76)</sup>、お父さまは忠義の心を忘れることなく、自身の立場では当然のお耳に障るようなことも申し上げて、大王を怒らせることになり、職を削られ、城門の外に追い出されなされた。甲子の年(1744)の結婚以来、大王のわたくしを愛してくださることは変わりなく、困難な局面においてもわたくしへの寵愛はやむことがなかったのだが、このとき初めて厳しい命令を受けて、身を隠すところも知らず、下室に下がるざるをえなかった。だが、それもしばらくのことで、お父さまの復職の命令が下りて<sup>77)</sup>、わたくしをまた呼び戻し、お示しになるご慈愛は以前とすしも変わらなかった。さまざまの事柄において恐縮して、至極であった聖恩に対しても、身を割り、骨を粉にしたとしても、どうして報いることができようか。わたくしの経験したことはきわまりなく、その事情をふたたび書きしたためようとしても、筆にすることばが見つからず、また記録することもできない。

国運が不幸で、貞聖聖母のお亡くなりになった翌月、仁元聖母がまたお亡くなり

になり<sup>78)</sup>、兩殿にお仕えしながら、おふたりの至極の慈愛を受けたわたくしは、一朝にして悲しみが重なって、頼るところもなくなってしまったが、その思いはなににたとえられようか。わたくしは身を貞聖聖母のもがり殿の近くに置き、わずかながらも誠をつくそうとして、午の時の祭祀と朝夕の哭泣を五か月のあいだ一度として廃することなく行っただので、わたくしを愛してくださった仁元聖母を看病して、その恩恵に十分に報いることができなかつた。病が日に日に重くなっていかれ、貞聖聖母はすでにいらっしゃらず、相談する相手もいずに、わたくしはひとりで焦燥しているほかはなかつた。大王は昼夜に薬湯をさしあげ、衣帯を解いてお休みになることもなく、いよいよご心痛であったが、お亡くなりになった後、大王を拜見すると、そのご衰弱ぶりが心配で、心細く、哀しみが深く極まりなかつた。

兩殿の三年の喪をようやく終え、己卯の年(1759)に、大王の再婚の嘉礼が執り行われたが、そのとき、口に出せないものの、気苦労が多かつた。宣禧宮はわたくしに対して、

「貞聖王后のお亡くなりになってしまった上は、この嘉礼を行って、後の位を定めることは国家の大事です」

とおっしゃって、大王にお祝いを申された。また、嘉礼のお支度をみずからなさるのにまごころをお尽くしにならないということはなく、宮中の様子が変わるのを心からお喜びになって、大王のために尽くされる徳行は、それはすばらしいものであつた。嘉礼の後、景慕宮が朝見なさつたが、その礼儀には至極ご注意なさって、うやうやしい態度であり、天性の誠孝がこうしたはしばしに現われるのだった。兩殿が安らかでいらっしゃれば、おのずと喜ばれたかもしれないが、亡くなつてしまわれた今、事情は宮中のすべてが知るところであつて、至極の悲しみを、天を仰いだところで、どうすることもできなかつた。

景慕宮の気質は孝友と慈愛に富んでおられ、わが子の主上を尊くお思いになることは、比べるものがないほどで、郡主たち<sup>79)</sup>にさえあえてご覧になれないようになさり、賤しい者たちの目に触れないように、名分を厳しくお定めになった。和順、和平の兩翁主に対しては姉君としてうやうやしく接し、和協翁主に対しては先朝における不遇を気の毒に思つて、さらにたいせつになさつて、その葬事にははなはだお悲しみになった。

鄭氏の妻になられた和協翁主に対しては、普通の人情として考えれば、先朝において偏愛なさつたので、ご自身では当然冷遇されるはずであつたのに、すこしも分

け隔てをなさらなかった。凡人としてこうした場合に遭遇して、それに対処するのに、どうしてそのように立派にふるまえようか。

辛巳の年(1761)の三月に主上が入学なさり、その月に元服の冠礼を慶熙宮において執り行われたが、景慕宮は行ってご覧になることができず、わたくしもまたひとりで行って拝見することもできなかったのもので、母親の自然な情として物足りず、また気掛かりは限りがなかった。

お父さまはこのとき困難な局面にいらっしゃり、王さまの恩恵にも報いようとし、また世子も保護しようとして、心労が過ぎて、胸の病が篤く、しばしば関格症<sup>80</sup>におちいっていらっしゃった。わたくしを見れば、天を仰ぎ、

「国事が太平であれ」

とおっしゃって、合掌なさったまごころは、上天が明らかに見せなわし、神明がわたらにいらっしゃってご存じであろう。これは決してお父さまに対しての私情で書くのではない。

辛巳の年(1761)の三月にお父さまは大拝<sup>81</sup>なさった。そのとき、大臣がいず、大王はお病気でいらっしゃったものの、大臣の職をつとめようというのがどうしてお父さまの本心であったろうか。お父さまはみずからは辞退なさったが、聖恩が至重だとして、安閑とはしておられず、千万の気掛かりが次第に大きくなって、ひたすら身を尽くしてでも国恩に報いるべきだとお考えになった。いつになったら気掛かりがなく、また、いつの日になったら心配がなく、安穩にお過ごしになれるのだろうか。宗廟に雨を祈るとき、献官<sup>82</sup>として行かれ、祭りを行われたが、歴代の神位を拝して、

「祖宗よ、どうかお助けくださって、国家が平安でありますように」

という祈りのことばを封書になさったが、わたくしはそれを読んで、悲しくて泣いたことであつた。

お兄さまが庚午の年(1750)に小科<sup>83</sup>に通つて、宮廷に参られた。景慕宮はご覧になって、

「意志と気概が備わっている」

とおっしゃった。辛巳の年(1761)には登科<sup>84</sup>して、講書院<sup>85</sup>の官員として世孫によく仕えて学問にはげみ、今の主上に対して功績が大きかった。お兄さまが講書院に宿直のときには、兄妹でしばしば会つて、国家の事を憂い、翌朝はにわかにかたがいに知らないそぶりをした。

辛巳の年(1761)の秋、世孫の嬪を選ぶことになって、清風金判書聖応の母親の還暦のお祝いにお父さまが出かけて、今のお後の幼い姿を拜見して、平凡ならざる資質でいらっしゃるということをしり上げるところ、景慕宮は金公時默<sup>86)</sup>がさしだした娘の単子をご覧になって、お気持ちが大きく傾かれた。全宮中の議論もひとつに帰して、嬪を決定することになったが、これは天の定めでもあったのだろう。景慕宮がその嫁をたいせつになさって、愛情をお傾けになることはひとかたではなく、また金氏の女子もやって来て、特別に深い愛情をこうむったのだが、まもなくして、景慕宮はお亡くなりになってしまった<sup>87)</sup>。金氏の女子の悲しみは深く、歲月がたつほどに追慕の気持ちも強くなって、ことばがそれに触れることがあれば、今にでも涙が流れ出さないということはなく、恩恵をこうむったからとはいえ、孝誠の思いがなければ、どうしてそのようにふるまえようか。

お后が二度目のお目見えを行ってすぐに、天然痘におかかりになり、それに ついて主上もまた痘疫におかかりになって、順調な回復ではあったが、三度目のお目見えがさしせまったときに、つづけて大きな病いを患われ、わたくしの気苦勞はまたいかばかりであったことか。主上の成痘は辛巳の年(1761)の十一月の晦日からのことで、十二月の十日ごろにはおなおりになったので、人びとも大いに喜んで、国家の慶事であった。大王も大いに心配なさった後でお喜びも大きく、景慕宮がお喜びになったのもまるで昨日のことのようで、わたくしも自然な情理として重い病に対して手を合わせてお祈りして、安らかに回復なさることを天地神明に祈ったが、お父さまが宿直して気を揉まれた真剣なありさまはなににたとえられようか。祖先の霊が守護して、両宮はしだいに回復なさり、十二月には三度目のお目見えを行って、壬午の年(1762)の二月二日に嘉礼を順調に執り行ったのは、国家の慶事としてこれ以上のものはなかった。

だが、なんと悔しく、悲しいことか。某年某月某日のことを<sup>88)</sup>、わたくしはどうしてすこしでも話すことができようか。天地が閉じふさがり、日月が光りを失う変事に出会い、わたくしにどうしてもこの世にとどまろうという思いがあったろうか。刀を取って、みずから生命を裁とうとしたが、傍らの者が刀を奪ったために意のままにならなかったのだった。十一歳の世孫に重なる至痛を残すまいと思い返し、わたくしがいなければ、世孫の成長をだれが見届けるのかと、こらえにこらえて、母としての生命を保つことにして、天に向かって泣き叫んだ。そのとき、お父さまは厳しい命令によって、東大門の外にとどまって、謹慎なさっていたが、

ことが一段落した後、お亡くなりになった。そのきわまりのない悲しみをだれが知ろうか。その当日、昏倒して、かろうじて生き存えていらっしやったが、ご自分のためにはどうして生に執着するお気持ちがおありであったろうか。わたくしの気持ちと同じく、ただ世孫を保護しようというまごころだけをもって、生き存えていらっしやったのだ。この赤心の情熱は鬼神だけが知るところであって、他のだれが知りえよう。その日の晩に、わたくしは世孫をお連れして、実家に戻ったが、その悲しみにくれて、すさまじいありさまは、天地もまさに光りを変じたかのようで、たとえるべきものがない。

大王はお父さまに、

「なんじは生き存えて、世孫の後見をするように」

とご命令になったが、このご命令は限りなく重く、お父さまは世孫のために感極まってお泣きになった。お父さまは世孫を撫でさすりながら、

「聖恩にお報いしなければ」

とおっしゃり、わたくしどもを戒められたが、わたくしの悲しみはまたいかばかりであったことか。その後、ご命令を守って、明け方に戻るとき、お父さまはわたくしの手をとらえ、中庭で声を失うほどにお泣きになって、

「世孫に仕えて万年を享受し、老境の福祿はなんとすばらしいものではないか」とおっしゃったが、そんな皮肉に対してわたくしの悲しみは万古にまたとないものであった。景慕宮の因山の前に、宣禧宮がやって来られ、わたくしをご覧になったが、お気の毒で、お哀しみになっているご様子はまたいかばかりであったことか。年老いたお身体に哀惜が過ぎて、かえってわたくしが苦しみに耐えながら、なぐさめてさしあげ、

「世孫のためにお身体をたいせつになさってください」

と申し上げた。宣禧宮は、葬礼の後に、慶熙宮にお戻りになったが、わたくしの心細さはいっそうつり、頼るところはどこにもなかった。八月には大王に拝したが、わたくしが心の中に抱いている思いがどのようなものであるかについては触れず、ただ、

「母子ともに健やかであるのは、ひたすら聖恩によるものです」

と、泣きながら、申し上げた。大王は手をとって、お泣きになり、

「あなたをそのように哀しませるつもりはなく、わたしはあなたを見るに忍びない。だが、あなたがわたしの心を穏やかにしてくれるのは、まことにけなげなこ



とだ」

とおっしゃることばを聞いて、わたくしの気持ちはいっそうふさがったものの、ねばりづよく生き残ろうという思いも強くなった。また、わたくしが、

「世孫は慶熙宮にお連れして、教育を受けることができるようお願いいたします」

とお頼みしたところ、

「あなたは世孫と離れて、耐えられるのか」

とおっしゃったので、涙が流れたが、

「離れて寂しいというのは小事であって、上にお仕えして学ぶのは大事です」と申し上げた。そのことばが受け入れられて、世孫を参らせることになったが、母子がはなればなれになる情理はことばにするのも難しい。世孫はすこしもわたくしのもとを離れたがらず、泣き泣き、出て行かれ、わたくしの心も刀で切られるようで、耐えて過ごしたが、聖恩はますます重く、世孫をおかわいがりになることが至極であった。宣禧宮は子を思う情を移して、世孫に悲しみの心をそそぎ込み、座臥と起居のいちいちについて、また飲食およびその他について、決してなござりにすることなく、一つの部屋に泊って、暁前に、

「書を読まれるように」

といて、お送り出しになった。七十の老人がいっしょに朝早くお起きになって、朝ご飯のお世話をなさったが、世孫が食事をお召しあがりにならなかつたら、祖母のまごころとしてむりやりにでもお口につめこませなさった。宣禧宮のそのときのお気持ちをまたどうして推し量ることができようか。

主上は四、五歳のときから、書を好まれたが、別々の宮殿に離れて過ごして、書を読んでいらっしゃらないのではないかという心配はいささかもしなかったものの、日に日にあちらに思いを掛けながら過ごしたことであった。世孫が母親を恋しがる情は切実で、王さまのおそばに仕えて眠り、明け方に起きてわたくしのもとにお手紙をお書きになり、書箴の場にお出かけになる前にわたくしからの返事を見て、気持ちを落ち着けになった。母親を忘れない心情はおのずとそうしたもので、三年をたがいに離れて過ごしたものの、以前と情は同じようで、どれほど成長なさったことかしのぼれるのであった。わたくしの持病がしばしば現われ、三年のあいだ病が去ることがなかったが、世孫はかねてより気になさって、医官と相談なさり、薬を作らせてお送りくださったのは、まるで大人のすることのようであっ

た。これは、天性の孝行ともいうべきで、十余歳の若年でどうして事ごとにそのように大人びなさっていたのだろうか。

その年の九月に千秋節<sup>89)</sup>があって、わたくしは居所を移す気持ちはいささかもなかったが、ご命令によって、やむをえず参ることになった。わたくしの居所は景春殿の南の小さい建物で、王さまはその建物の名を嘉孝堂とつけて、懸板にみづから文字をお書きになって、

「あなたの孝心に対して、今日は報いようと、筆を執って書いてみたのです」とおっしゃった。わたくしはそれをいただいて、涙が流れ、もったいないと不安になったが、お父さまもやって来られて、感祝なさって、家中の封書にはいつもその堂号を書いて通わせるようになされた。

#### 〔訳注〕

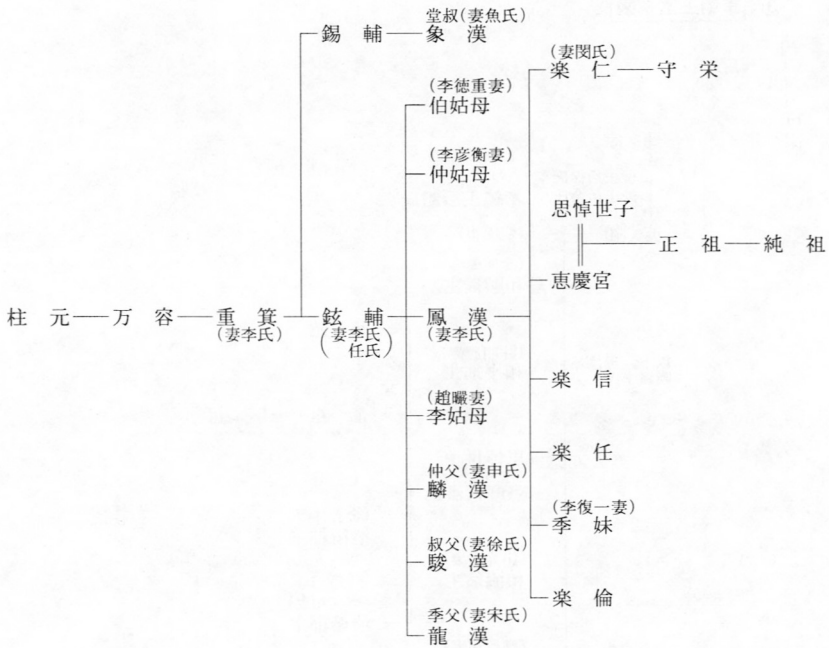
- 1) 筆者の父親の洪鳳漢。
- 2) 筆者の母親の韓山李氏。
- 3) 洪鳳漢の長孫で、筆者の兄の洪楽仁の長子。
- 4) 壬午の年(1762)に亡くなった夫の思悼世子を追慕する情。
- 5) 筆者の祖父の洪鉉輔。
- 6) 贈貞敬夫人、全州李氏。
- 7) 洪楽仁。
- 8) 宣祖の附馬(婿のことをいう)、すなわち、宣祖の一女の貞明公主の夫となった洪柱元。筆者の五代の祖となる。
- 9) 洪柱元の一男の洪万容。
- 10) 洪万容の一男の洪重箕。
- 11) 洪重箕の一男の洪錫輔。
- 12) 李朝宣祖の代の名宰相であった尹斗寿(1533—1601)。
- 13) 礼曹判書贈巨輔国崇祿大夫議政府領議政。
- 14) 星州李氏。朴玄石の門人の李世璞の娘。
- 15) 士、士人の意味から、官職につかない学者をも意味し、さらには学問と徳行をかねそなえた人物に対する敬称ともなった。
- 16) 副提学李徳重の妻。ちなみに、日本における親族名称は中国のそれを借用しながらもずさんである。正確には、父方のオバ、つまり父の姉妹については「姑」を使って、それに伯、仲、叔、季をつけて、長幼の順を明らかにする。伯姑、仲姑、叔姑、季姑とするわけで、日本では誤用しているが、伯母と書けば伯父の妻、叔母は叔父の妻をいうのが正しい。

- 17) 青綾君の息子の觀察使李彦衡の妻。
- 18) 吏曹判書趙暉の妻。
- 19) 仲父洪驍漢の妻。
- 20) このとき李滌が黃海道觀察使であった。
- 21) 筆者にとっての外祖父の李滌。
- 22) 母方のオジについては「舅」を使うのが正しく、ここでは母の兄の李秉健。ちなみに母方のオバについては「姨」を使う。
- 23) 季母は季父の妻。
- 24) 成均館の最高位。
- 25) 洪錫輔の息子の洪象漢。
- 26) 景宗とその王妃の魚氏の陵。京畿道高陽郡にあった。
- 27) 処女単子。すなわち適齡期の処女をもつ家が申告すること。またその申告書。
- 28) 英祖妃。達城府院君徐宗悌の娘。達城徐氏。
- 29) 英祖の妻妾の一人。思悼世子の母である李氏。宣禧宮というのは彼女を祭るお堂の号。
- 30) 英祖の三女。母は宣禧宮。錦城尉朴明源に嫁した。ちなみに、王の嫡出の女子を公主といい、庶出の女子を翁主という。
- 31) 昌慶宮の中にある宮殿。
- 32) 宮廷で働く女官。宮女。
- 33) 曾祖父世代の遠い親戚。
- 34) 祖父世代の遠い親戚。
- 35) すべての内人を監督指揮してさまざまな宮殿の用を果たす内人。
- 36) 本家。筆者の家は分家に当たる。
- 37) 英祖の三女の和平公主の夫の錦城尉朴明源。
- 38) 洪錫輔の息子の洪象漢。
- 39) 洪象漢の妻の魚氏。
- 40) 舅(おじ)の知礼公の妻の南陽洪氏。
- 41) 外祖父李滌の娘の金生員の夫人と宋参判の夫人。
- 42) 昌慶宮の景春殿の北側にある。緑の瓦で葺かれた高麗時代からの建物。
- 43) ここでは、英祖、仁元王后、貞聖王后をいう。
- 44) 肅宗の継妃。慶恩府院君金柱臣の娘。
- 45) 英祖の一男孝章世子の嬪の豊壤趙氏。正祖がその兄をしのんで追尊して真宗大王としたので、王后とある。
- 46) 宣祖の継妃の仁穆大妃の一女。永安大朴柱元に嫁した。
- 47) 昌徳宮の正殿。

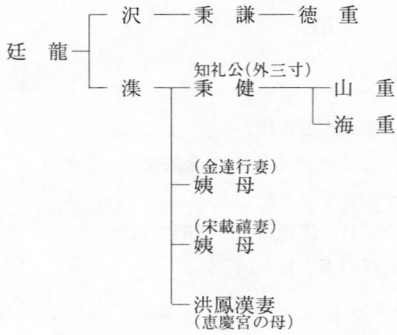
- 48) 昌徳宮にある坤殿の正堂。
- 49) 昌慶宮にあった殿閣で、王世子の居所であった。
- 50) 儲承殿の横にあった建物。
- 51) ここでは、仁元王后、貞聖王后、宣禧宮の三人。
- 52) 李朝の太祖と肅宗の画像を祭る建物。
- 53) ソウルの中心にあつて、李朝歴代の王の神位を祭る。
- 54) 思悼世子の宮号。
- 55) 肅宗の継妃の仁元王后の実家の慶恩府院君金柱臣。
- 56) 英祖妃の貞聖王后の実家の達城徐氏。
- 57) 李朝では南北老少の党派に別れ、たがいに論難しあう党争にあけていた。
- 58) 正祖十四年辛戌（1790）の後の純祖の誕生をさす。
- 59) 英祖には十二人の女子があり、宣禧宮の腹に限っても早逝した女子を含めて五人がいた。
- 60) 和協翁主と和緩翁主。
- 61) 洪樂信。
- 62) 洪樂任。
- 63) 大将の伝令として護衛をし、また親旗、令旗をもつ兵卒。
- 64) 王の被る冠の一種で、頂が平になっているもの。
- 65) 王。以後この書物では恵慶宮所生の正祖をさす。
- 66) 元子、元孫を輔育し、教導する官員。
- 67) 後に李復一の妻となる。
- 68) 洪樂倫。
- 69) 景慕宮に精神異常が現われた。
- 70) 肅宗の国舅である驪陽府院君閔維重。
- 71) 閔維重の次男の閔鎮遠。
- 72) この書物は洪守栄に向けて書いている形をとっている。
- 73) 洪樂信の妻の林川趙氏。父は吏曹判書趙明鼎。
- 74) 洪樂任の妻の同じく林川趙氏。父は応教の趙明健。
- 75) 王、王妃、王世子などの棺を山に納めること。
- 76) 英祖三十三年丁丑（1757）の十一月、王世子が七月から進見を欠席して、王は承旨を呼びつけて問責した。洪鳳漢は王に諫言して、職を削られ、ソウル外に追放された。
- 77) 同年の十二月に特赦があつて、前職に戻された。
- 78) 英祖三十三年丁丑（1757）二月十五日、昌徳宮觀理閣において貞聖王后が昇遐。同年三月二十六日、仁元王后が昌徳宮永慕堂にて昇遐。

- 79) 王世子の女子を郡主という。ここでは、清衍と清瑤。
- 80) 食欲がなく、吐き気がして、大小便の出ない症状という。
- 81) 議政の職に任じられることをいう。
- 82) 国家が臨時の祭りを行うときに派遣した祭官。
- 83) 生員と進士とを選ぶ科挙。
- 84) 文科に及第すること。
- 85) 世孫講書館。すなわち、王世孫に經典を教える官庁。
- 86) 金聖応の子、正祖の国舅清原府院君。金道泳—金聖応—金時默。
- 87) 英祖三十八年壬午(1762)に思悼世子が亡くなったこと。
- 88) 壬午禍変。英祖三十八年壬午閏五月十三日、思悼世子が処刑された。
- 89) 王世子の誕生日。ここでは王世孫の正祖の誕生日をいう。

① 豊山洪氏系図



② 韓山李氏系図



③ 李朝王室系図

